

口腔管理で健康づくり 医療連携で高齢化対策

——時代とともに歯科を取り巻く状況も大きく変化しています。まず高齢化対応について。

渡邊 超高齢社会を迎えておりますが、元気な高齢者の方も多くいらっしやいます。しかしながら七十歳以上になると、身体のいろいろなところに問題が起きてくると思います。近年では、歯科医もかかりつけ歯科医として赤ちゃんから高齢者まで、各世代の健康に貢献することが求められています。

高齢化対応の中で介護や在宅診療も必要になってきます。二〇一四年に医療介護総合確保推進法が施行され、その基金を活用して在宅療養支援歯科医養成推進事業の一環として在宅歯科医療学寄付講

座が今年二月に愛知学院大学歯学部設置されました。在宅歯科医療学専門の講座は全国で初めてです。愛知県では在宅診療に積極的に取り組む歯科診療所へ在宅療養支援歯科診療所が、二七四カ所（二五年三月一日現在）あります。

歯科診療所全体の約七%ですが二年までに一五%まで広げることが目標にしています。実習、座学を修め専門知識を持った歯科医が医師、介護職など多職種と連携を取りながら地域医療に貢献していきます。

——医学と歯学の連携ですね。**渡邊** かかりつけ医との連携が必要な事例ですが、例えば心臓病の薬を飲んでいる人が歯科で親知

らずなど、歯を抜くときは、以前は心臓病の薬を飲むことを止めま

したが、今は医師との連携で止めてなくて済む場合もあります。最近では、医科の四〇〇床以上の大規模病院の約七〇%は電子カルテ化が進んでおり、中規模や小規模病院にも導入が進められています。病歴や投薬の状況などがすべて分か

り、医療連携に重要な役割を果たします。この先、歯科にも導入される時が来ると思いますが、個人情報などの問題もあり、慎重に進めていかなければなりません。——歯科医の業務の将来、課題について。**渡邊** 平均寿命も健康寿命も共に延びてはいますが、残念ながら、

その差は開いて、介護が必要な自立できていない期間が長くなっています。在宅歯科医療学寄附講座を通して高齢者の病状を正確に診断して診療できる若い歯科医を育て、高齢者の口腔機能の向上と生涯美味しく食べ、元気に生活できるように健康寿命の延伸に関わっていくことが重要です。今後、歯科医の業務は診療中心から予防・保健中心にシフトしていくでしょう。8020（八十歳で二〇本以上の歯を保つ）運動を進め、少しでも自分の歯を残していけるよう啓発していきたいと考えています。

もう一つは認知症対策です。認知症と口腔との関係も深いと言われています。歯が二〇本以上ある人と比べて、二〇本ない人では、認知症になる確率が一・九倍高くなると言われています。これらをつまえて、高齢化に伴い歯科医療の形態は大きく変わっていくと思います。

また、歯ぎしりや食いしばりで悩んでいる方も多くいらっしやいます。主に寝ているときに無意識の状態では咀嚼筋がストレスなどで